

28P1-pm333

愛知万博シンガポール館で展示された生薬に関する考察(2)

○森田 祐基¹, 菰田 綾佳², 西野 正雄³, 林 優樹³, 西野 ゆり⁴, 宮本 如奈⁵, 高倉 弘士⁶, 乾 真由美⁷, 島山 有理⁸, 山路 誠⁹(¹初芝富田林高等学校, ²府立藤井寺高等学校, ³府立富田林高等学校, ⁴府立長野高等学校, ⁵同志社大学文学部, ⁶立命館大学産業社会学部, ⁷大阪薬大, ⁸長崎大学薬学部, ⁹日本薬大)

「目的」前回、愛知万博(2005)のシンガポール館ならびにブータン館で展示された生薬について、生薬名、基原、用法に基づいて分類、整理し報告したが、発表後、誤りや方法について指摘を受けた。そこで今回、展示生薬を正確に把握する目的で、生薬の同定と分類について厳密に再検討した。このうちシンガポール館の展示内容及び方法について報告する。

「方法」同館から譲り受けた生薬約 250 点について、名称のあるものは性状と中薬大辞典の記載から基原を類推し同定した。名称のないものは性状から一般的生薬名を明らかにし基原を類推した。生薬名と基原を明らかにしたものについては薬効・異名等を文献調査した。展示方法については、レイアウトや大きさ、様式をまとめた。

「結果」検討した展示品 250 点は中国医学の医薬品および生薬(中薬)で、(上海科学技術出版社、小学館編)中薬大辞典による植物薬 195 点、動物薬 9 点、鉱物薬 4 点、さらに加工製造品 4 点であり、一般的家庭が用いる食品が 9 点、名称記載が不確実であり生薬名の同定不能が 9 点であった。また、生薬名の同定はできたが名称が中薬大辞典になくシンガポールでの通称名と思われる物、例えば葱白は風葱干、穀精子は谷精子、鶏子殻は鶏旦壳など 73 点あった。

「考察」同博覧会の外国館における医薬品展示は、薬学専門家が担当したものが皆無で一般見学者に十分な情報が伝わっているとは言い難く、同館でも生薬名の無記載が目立ち、修正さえできない状況にあったと考えられた。一方で同館の展示は同国で流通する生薬の展示自体に意義があり、中薬としての展示でもなく、取引対象としての展示でもないと推測された。また展示スタイルとして見られた身の丈以上の高さ、かつ手にとれる生薬の配置は、同国における生薬の圧倒的存在感の誇示とも解釈でき十分成功を収めたと言える。それだけに専門家の配置があればさらに多くの情報提示が可能であったと考える。